| 報告番号 | ※　　第　　号 |
|---|---|

# 主　論　文　の　要　旨

| | |
|---|---|
| 論文題目 | 第二共和政下におけるボードレールの詩学<br>――挫折した詩集『冥府』を通して―― |
| 氏　　名 | 佐々木　稔 |

## 論　文　内　容　の　要　旨

19 世紀フランスの詩人シャルル・ボードレールは、『悪の華』(1857)という詩集によって知られているものの、生前に刊行した詩集はこの一冊だけであった。しかしながら、それ以前に実現しなかった韻文詩集の計画が二つあった。それが『レズビアン』（1845-47 年）と『冥府』（1848-52 年）である。本論文で検討するのは、この挫折した詩集のうちの一つ『冥府』である。ボードレールが『冥府』を構想していた時期というのは、フランス史で言えば、第二共和政の時期（1848-51 年）にあたる。

『冥府』研究の具体的な検討対象となるのは、1848 年から 52 年までの期間に、ボードレールが「詩集『冥府』からの抜粋」と銘打って発表した二つのテクスト群である。それが、1850 年 6 月の『家庭画報』紙に発表された二詩篇と、1851 年 4 月の『議会通信』紙に発表された十一詩篇である。これら二つの資料体においては、詩篇の掲載と詩集のタイトルが同時に公表されたことに加え、「現代青年の動揺と憂鬱」(『家庭画報』)、「現代青年の精神的動揺の歴史」(『議会通信』) という詩集の主題まで明記されていた。ボードレールの先行研究は世界的に膨大なものとなっているにも関わらず、『冥府』の名の下に発表された詩篇と詩集の主題とを結びつけて体系的に解釈するということがこれまで為されてこなかった。しかしながら、第二帝政期に『悪の華』や散文詩集『パリの憂愁』、さらには「現代性」の理論などによって展開される、ボードレール詩学の生成過程を解き明かすうえで、『冥府』はきわめて大きな意味を持つものである。このため、時代的な文脈を強調するために、ボードレール研究においてしばしば用いられる第二帝政期のテクストよりも、第二共和政期の諸テクストを参照しつつ、『家庭画報』二篇、『議会通信』十一篇について以下のように検討した。

まず、1850 年の『家庭画報』に掲載された二篇であるが、これは「驕慢の罰」、「まじめな人々の葡萄酒」という詩篇である。「驕慢の罰」は、瀆神の言葉を口にした神学者が、そのために理性を失う罰を受けることになった、という筋書きの詩である。この詩の発想源となったサン＝ルネ・タイヤンディエという学者の「ドイツ無神論とフ

ランス社会主義」という論文(1848)を、ボードレールがどのように受け取ったかという切り口から、神学者の寓意が何を意味したかを第二共和政下の文脈において検討する。タイヤンディエの論文とボードレールの詩篇は、共に社会主義者プルードンに対する態度表明を含意するものである。タイヤンディエがプルードンをはじめとするフランスの社会主義者たちを厳しく批判したのに対し、ボードレールはむしろタイヤンディエが表明するようなブルジョワ的道義性の遵守によって社会が改善していくという見方そのものを、ユートピア的な夢想であるとして攻撃した。つまり、ボードレールはこの詩篇で、プルードン的社会主義に同調しているのである。「まじめな人々の葡萄酒」は、「驕慢の罰」と同様の観点を引き継ぐものであり、日々の労苦によって疲弊しきった労働者が、葡萄酒を飲むことによって生気を取り戻すと共に、葡萄酒そのものもまた、労働者ののどに落ちていくときに喜びを感じるのであって、こうした人間と葡萄酒の幸福な結びつきから詩が生まれると主張する詩篇である。一年後の『議会通信』に掲載された「葡萄酒とハシッシュについて」という記事で、ボードレールは葡萄酒を飲まない人間を偽善者として非難しており、フランスの労働者たちとの共感を欠いた人々を強く批判している。したがって、『家庭画報』に掲載された二篇は共に、社会道徳的な観点と美学的な観点との結びつきを示すものであって、そこから、同時代の人々に対して詩人が批判的であったり肯定的であったりする論拠を導き出すことができる。後年のボードレールは他の価値基準に対する「美の自律性」の立場を強く打ち出すのであって、これと比較すると、第二共和政下におけるボードレールの詩学は特殊な性格を示すものであったことがわかる。その重要な論拠が「葡萄酒とハシッシュについて」という記事なのである。ボードレールがここで論じた「陶酔の詩学」は、芸術的理想と社会道徳を総合的に把握することを目指して書かれたものであり、まさしくこの時期の詩学の一つの指針を明確に打ち出したものであると言える。そのため、『議会通信』十一篇を分析するための予備作業として、「陶酔の詩学」がどのようなものであったかを検討した。この記事では、葡萄酒とハシッシュが共に芸術的理想に類似したイメージを与えるものとして記述され、道徳的な観点から葡萄酒が肯定的に扱われ、ハシッシュはその過激な効果と、結果としてもたらされる意志の衰弱を理由に否定的に論じられている。つまり、ボードレールは超自然性の詩学がどのようなものであるかを論じるために薬物を引き合いに出すと同時に、芸術的理想へ至るためには、ハシッシュのように「一挙に天国を獲得する」ような方法をとってはらないと主張するのである。

こうした美学的であると同時に道徳的な性格を持つ「陶酔の詩学」を、『議会通信』に掲載された『冥府』十一篇に結びつけるため、この詩学の観点から、十一篇の導入を成す「憂愁 I」を検討した。ボードレールも述べるように、幸福にせよ憂鬱にせよ、摂取する人間の人格を過度に高揚させるのがハシッシュであるならば、陶酔状態の一

つの位相として極端にまで推し進められた倦怠の状態を考えることもできる。そして、従来の諸研究が示すように、「憂愁 I」で示された超自然性の詩学は、詩的主体がその人格性を喪失するほどの憂鬱の昂進状態を示すものである。その「憂愁（スプリーン）」の世界では、人格や魂を持ったものがその人格性を失い、逆に人格を持たない事物の方が、あたかも声や魂を持っているかのような趣を呈することになる。これは、ハシッシュによって高揚した詩的主体の状態と通底するものである。

これらの諸点を踏まえて、『冥府』十一篇の検討が行われることになる。『冥府』十一篇については、従来の諸研究では本格的に論じられてこなかったが、詳細に検討してみると、ここにはある種の構造性があることがわかってくる。まず、「憂愁 I」に続く二番目の詩篇「不徳の修道僧」から、五番目の詩篇「猫たち」までは、ボードレールの芸術的理想が、様々な観点から「力強さ」のイメージと共に提示される。本稿ではこれらを「理想」詩群と呼ぶ。次に、そうした理想へと至るための径路が決して安易なものではなく、精神が解体するまでに自らを擦り減らさなければならないほど困難な作業であることが主張される。その帰結が「死」である。十一詩篇の中央に「死」を表題に持った詩篇が二つ配置されることによって、理想が芸術作品で描かれるような美しいイメージばかりではないということが弁証法的に示される。これによって、詩群は理想と死が生み出す緊張関係を伴うものとなる。この二篇を「死」詩群と呼ぶ。「死」に続いて現れる諸詩篇は、「憎しみの樽」、「ラ・ベアトリックス」、「憂愁 III」である。これらの諸詩篇に登場する主体は、理想に至る絶望的展望を認識した状態に堕ちている。そこで描かれるのは、事物化した自我、希望の届かぬ混沌に落とされた自我、ひび割れた自我である。そうした絶望的な状態にあって、なお弱々しい力で理想の形象を求め続けるのである。これらを「絶望」詩群と呼ぶ。そうした『冥府』の世界を見つめ続けるのが、十一篇のエピローグの主人公たる「木兎たち」である。「木兎たち」は、『冥府』の基調を成す絶望と不動性の状態での理想追求を見守っている。彼らの瞑想的な姿勢が教えるのは、移ろう影に「酔う」ことが懲罰をもたらすという認識である。移ろう影とは、自らの理想を失った芸術家たちが追従する公衆の人気、あるいは民衆を騙そうとするデマゴーグたちの提示する「万能薬」であろう。いずれにせよ、「木兎たち」もまた美学と道徳との緊密に結びついた一つの公理を要請する。それは、芸術的、社会的とを問わず、理想を追求することは絶望的なまでに困難なものであり、安易な解決をとることは許されないということである。つまるところ、『冥府』における「現代青年の精神的動揺の歴史」とは、自らの理想を求め続けたロマン主義以来の青年たちの歴史の記述なのである。これは 1848 年前後におけるボードレール自身の反省を踏まえたものであり、『冥府』期の検討から得られたこのボードレール像は、既に歴史的評価の定まったように見える詩集『悪の華』について再考を促すものとなるであろう。